教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会
発行者　瓦　井　康　司
編　集　広　報　部

もくじ

◎巻頭言…… 1
◎関ブロ東京大会報告…… 2
◎第61回県教頭会研究大会 …… 3
研究大会分科会報告…… 4～15
◎特色ある学校…… 16
◎地区だより…… 17
◎ひろば・編集後記…… 18

巻頭言

ちょっとNIE　－ひらかれた学びへの誘い－

栃木県NIE推進協議会事務局　髙　橋　正　彦

「NIE」はNewspaper in Educationの頭文字をとって「エヌ・アイ・イー」と読みます。新聞を活用した教育活動のことです。学習指導要領では、言語活動の充実、情報活用能力の育成や学校図書館の活用にかかわり新聞の活用が示されています。また、「学校図書館整備等５か年計画」（令和４～８年）では小学校等２紙、中学校等３紙、高等学校等５紙の新聞配備が目標とされています。教材や教育環境の充実に新聞が重視されるのは教材として高い価値を有しているからです。例えば、〇新書約１冊分の豊富な情報量、〇見出し等の工夫で内容が一目でわかる一覧性、〇出来事の原因や背景、見通し、課題、人々の心情等を深掘りする詳報性、〇自分のペースで読んだり切り抜いたりできる記録性･保存性、そして何より、〇厳しいプロの目で取材･整理･編集されるという信頼性等があげられます。古くは江戸時代の瓦版から、連綿と人々の知的好奇心に応え、確かな情報を伝えることに努めてきたメディアです。インターネットは膨大な情報に素早く触れることができますが、フェイクニュースやフィルターバブルなど信頼性に不安があります。テレビやラジオの映像や音声は流れてしまい、自分のペースで学ぶには工夫が必要です。翻って、新聞はヒトの間尺にあった安全・安心な情報・教材として再認識できるのではないでしょうか。

新聞には急激な社会の変化やそれを生み出している人間の知恵がさまざま取り上げられています。社会に興味をもち社会をつくりあげている人に関心をもち、よりよい社会を築こうとする課題意識や意欲を育むことができます。また、ＳＤＧｓ、防災、人権など新しい学びの材料を日々提供してくれます。それらは、身近な地域から世界各地のことが多岐にわたって取り上げられ、学習指導要領が求める「学びに向かう力､人間性等」を育てる内容が満載です。新聞のリアルでタイムリーな情報は､子供たちを「ひらかれた学び」に誘い「じぶんごと」として社会に積極的に働きかける実践力を育むことができます。

そこで「ちょっとNIE」です。朝の会や帰りの会、昼の放送、授業の導入・まとめ等で、子供たちに知ってほしい、考えてほしい記事を取り上げるだけでよいのです。習字にもってきた新聞紙を「ちょっと」とりあげても立派なNIEです。気になる写真や絵を切り抜いて画用紙に貼れば｢みんなのギャラリー」となり、それらを見合えば背景にある社会への気づきが生まれます。新聞づくりは、読み手を意識しながら記事を書いたり見出しやレイアウトを考えたりして思考力･判断力･表現力を育てる格好の活動です。

「ちょっとNIE」は「社会に開かれた教育課程」の実現に「ちょっとしたもの」です。先生方みんなで「ちょっと」取り組めば、教材の開発力や授業力も高め合えるでしょう。多忙な学校で手軽に取り組める「ちょっとNIE」、教頭先生方、自校でいかがしょうか…。

関ブロ東京大会報告

第64回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会東京大会に参加して

宇都宮市立宝木中学校　峰　村　美智子

11月16日、17日に行われた関ブロ東京大会は1800名を超える関東甲信越地区の副校長・教頭が参加し、盛大に開催されました。１日目は、千葉ロッテマリーンズを日本一に導いた元監督である西村徳文氏による『「和」～信じ抜く力～』と題した記念講演が行われました。「一人一人を信じる」「伝え方を工夫して信頼関係を築く」といったチームワークやコミュニケーションの大切さから、組織が一丸となって取り組むための意識作りについて学びました。２日目は、研究主題「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」のもと12分科会に分かれて協議が行われ、私は「教職員の専門性に関する課題」に参加しました。本県塩谷中学校根本先生より、相互の学び合いを促進する授業参観や地域学校協働活動推進本部会議などについて、東京都江戸川区小岩第一中学校稲葉先生・同区葛西第二中学校田村先生より、ＩＣＴ活用における教員の専門性や特別な配慮を要する生徒に対する教員の指導力の向上について､組織的な研究の実践発表がありました。発表後に行ったグループ協議では､各都県における取組、副校長会や教頭会の研修などについて、情報や意見交換を行いました。また、教職員一人一人の力量やよさなどの理解、地域で足並みを揃えるための情報共有の大切さ､「正解は一つではない。自分の持ち味を生かしてほしい。」と指導助言をいただきました。今大会を通して、どんな状況であっても組織として力を合わせて前に進む管理職でありたいと改めて思うことができ、実りある研修となりました。

今後は学んだことを生かし、副校長・教頭としての資質・能力を高めていけるよう努めていきたいと思います。

関ブロ東京大会　提言発表を終えて

上三川町立坂上小学校　石　川　　洋

第２Ａ分科会「子供の発達に関する課題」に関して、研究主題を「地域の教育力を生かした協働体制を通して児童の資質・能力を育てる取組－地域とともにある『魅力ある学校づくり』推進における教頭の役割－」として実践事例をもとに提言発表をしました。

コロナ禍で、地域との連携が思うように進まなかった時期が過ぎ、中止・縮小されていた活動が復活してきました。そこで、子供たちの資質・能力を学校と地域・家庭が連携してぶれずに育てていけるようにすることが重要です。共通のゴールイメージを持って推進するために、改めて地域の願いを聞いたり、教職員に地域連携の大切さを説明したりする必要があること等、都県を跨いでも同様な課題が浮かび上がった貴重な機会でした。

関ブロ東京大会　第５Ｂ分科会提言を終えて

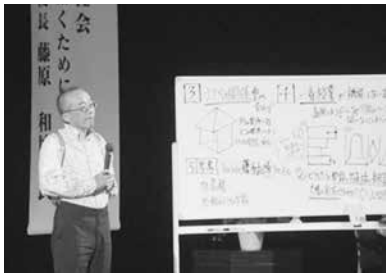
塩谷町立塩谷中学校　根　本　一　明

第64回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会東京大会２日目の第５Ｂ分科会「教職員の専門性に関する課題」において、「実践的指導力の向上を図る教頭の在り方～協働する教職員の育成を目指して～」と題し提言発表を行いました。協議の柱を「協働体制構築による資質能力の向上」「学校運営参画意識の向上」として協議されました。質疑応答においてもグループ協議においても、多くの学校では効果的な校内研修の方法や地域との関わり、さらに働き方改革の取り組みに関する事例も情報提供されました。多くの学校においても課題は人材育成、地域連携、働き方改革にあるようで、各学校での様々な取り組みが協議され大変勉強になりました。

第 61 回研究大会

全体会・講演会に参加して

宇都宮市立若松原中学校　鈴　木　克　明



今年度は，コロナウイルス感染症が５類に移行し，分科会・グループ協議まで行われる参集型で開催できた研究大会でした。県内の教頭先生，副校長先生が一堂に会し，顔を合わせて意見交換や情報交換ができることに改めて嬉しさを感じることができました。

全体会では，栃木県教育委員会教育長　阿久澤真理様をはじめ，多くの来賓の方のご臨席のもと，盛大に開会行事及び基調提案が行われ，第61回研究大会が華々しく幕を開けました。

記念講演では，「つなげよう　学校と地域社会　～子どもたちの未来を拓くために～」と題して，「朝礼だけの学校」校長　藤原和博 先生からご講話いただきました。まず始めに現在進行している最大の社会変化として，ＡＩの導入，ＡＩとの共業についてお話がありました。今後，正解至上の仕事はどんどんＡＩに取って代わられる一方で，思考判断を必要とする職業はなくなりにくい世の中であるとご指摘がありました。そんな世の中を生きるために，基礎力としての「人間力」，基礎学力としての「情報処理力」，そして納得解を組み上げ，脳を拡張する「情報編集力」の３つの逆三角形の力が大切であること，その中でも特に，これからは「情報編集力」が求められること，そしてそれは遊びの中で培われるものであることなどを話されていました。また，終盤には「学校がウソくさい」の名のもと，「今や一斉授業が機能しないことを直視しなさい」と話され，児童生徒の中に「教師役」をつくって展開する授業のあり方を提案されていました。

グループワークを取り入れながら楽しく考える参加型の講演で，藤原先生の話を拝聴し，副校長としてこれからの時代に合った変革を進めなければならないと強く感じました。また，藤原先生の私たち教頭・副校長への応援メッセージがとても心強かったです。

研究大会に参加して（来賓案内・接待係をとおして）

宇都宮市立昭和小学校　村　松　保　子

研究大会当日は、来賓の皆様や講師・指導助言の先生方の案内・接待係として、事前打合せでの資料を再確認しながら、控室や講演会時の湯茶の準備と接待、タイムスケジュールに沿った開会行事や講演会会場への案内などを、担当の先生方と協力しながら行いました。事務局の先生方が細やかに支えてくださり、無事に役割を果たすことができました。

また、当日までの複数回にわたる会議において、県教頭会会長を始め役員の先生方、分科会に携わる多くの先生方の、有意義な大会にしようという熱い思いを感じることができました。その中での細かな打ち合わせの様子や、当日の係をまたいでの連携協力など、研究大会の内容以外での学びや経験も今後に生かしていきたいと思います。

第61回研究大会　分科会に参加して

足利市立筑波小学校　坂　田　幸　恵

第５Ａ・５Ｂ分科会では「教職員の専門性に関する課題」として、「個々の資質能力の向上と教職員集団の力を高めるための教頭の役割」「未来を切り拓く力を育む教職員の専門性の育成」についての発表がありました。求められる資質能力の確認、実態把握、課題や取組の共有等についてのすばらしい発表でした。その後、各班において情報共有も含めた活発な協議が行われました。最後に、陽西中学校の鈴木校長先生より「自校の先生方と共に自分たちの強みを生かして独自の学びの場をつくる」「教頭職は、教職員との学びあいと成長のコーディネーター」「肝心なのは、教頭の職に気概をもつこと」という温かい指導助言、エールをいただき、有意義な分科会となりました。

研究大会分科会報告 「未来を切り拓く力を育む　魅力ある学校づくり」

第１Ａ・１Ｂ分科会　教育課程に関する課題（小学校・中学校）

助言者　栃木県教育委員会事務局義務教育課副主幹　　栗坪　辰徳 先生

未来を切り拓く力を育む教育課程の編成・実践・改善
－グローバル化や情報化社会への対応力を育む小中連携を生かした教育課程の研究と実践－

提言地区　下都賀地区小学校教頭会

コロナ禍を超えて－持続可能な教育課程の編成と教頭としての役割
－コロナ禍における教育課程編成の工夫と今後の課題－

提言地区　宇河地区中学校副校長・教頭会

１　提言趣旨

⑴　下都賀地区
　　小学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

今回の学習指導要領では、言語能力や情報活用能力、それらを生かした問題発見・解決能力等の育成が挙げられている。本町で行っているＩＣＴ機器を活用した小中連携・学校間交流等がそれらの育成を進め、情報化社会への対応力を育む力の育成を図る上で有効であると仮説を立て、そこに教頭としてどのような関わりをもっていくか検討した。

イ　研究の概要

①１年次：令和５年度
　各校の現状把握、実践と成果・課題の検討
②２年次：令和６年度
　１年次をもとに各校で実践と成果・課題の検討
　教頭の役割の明確化
③３年次：令和７年度
　２年次をもとに各校で実践、研究のまとめ
　今後の方向性の明確化

ウ　成果と今後の課題

・異なる価値観や教育・文化に触れることで、自校の教育活動の編成に活かすことができた。
・他校の教育活動に触れ、教頭として幅広い知識や交流活動の経験を身に付けることで、学校管理者としての知見を広めた。
・各種交流活動が形式的内容に限定されている。交流活動の形を工夫していきたい。
・ＩＣＴ環境面が課題。「物的環境の整備」に教頭として関わり、改善していきたい。

⑵　宇河地区
　　中学校副校長・教頭会

ア　主題設定の趣旨

新型コロナウィルス感染症の対応で各学校はそれぞれ教育課程の工夫改善を行ってきた。一方、国では次の時代に必要な資質・能力の育成に向けた着実な取組が進んでいる。そこで、コロナ禍での各校の取組の成果と課題を検証し、持続可能な教育課程の編成について研究を進める必要があると考え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

①１年次
　アンケートの実施、教育課程における課題整理
②２年次
　１年次の課題を解決するための方策の実施
　実施した方策の成果と課題整理と教頭の役割
③３年次
　２年次の課題解決に向けた取組、持続可能な教育課程編成・実現に向けて教頭の役割等の提言

ウ　成果と今後の課題

・アンケートを通して、各学校の教育課程編成上の工夫や改善点が共有できた。また、工夫したメリット・デメリットについて整理できたことで、持続可能な教育課程の編成に向け、今後の課題が見えてきた。
・学校教育目標や目指す生徒像等を教職員や保護者、地域の方々と見直したり、カリキュラム・マネジメントの視点から見直したりする必要がある。

２　グループ協議内容

⑴　提言Ⅰについて

・小中一貫教育や小中連携の取り組みは、市町や校区により様々。県内でも小中一貫校や義務教育学校が増えているので、各校での成果を共有し、各校区の実態に応じた小中連携が推進できるとよい。

・小規模校では、本提言が大変参考になった。ＩＣＴを活用することで、他校や多様な人々との交流の可能性が広がる。そのきっかけづくりに教頭として積極的に関わることで校内組織を活性化していきたい。

・ＩＣＴを使った小中相互の授業研究を実践している。校区の児童生徒にどんな力（グローバル化・情報化社会への対応力等）を付けるか、ビジョンの共有が大切。そのために取り組むべき実践が見えてくる。一方、新たな取り組みにはエネルギーが必要。働き方改革とのバランスを考慮したい。

・幼保小中が系統的に交流できる方法を検討している。まずは、中学生が家庭科の授業で幼児と関われるようにしたい。交流先に目的を明確に伝えながら、教頭としてマネジメントしていきたい。

⑵　提言Ⅱについて

・行事の見直しに関して、教頭は危機管理の視点も重視すべき。運動会の午前中開催や集会活動のリモート方式は、熱中症や感染症対策の点からも理解を得やすかった。

・働き方改革の視点から教育課程の工夫改善を図る場合、学校運営協議会等の議題とすることで一定の理解が得られた。さらに行政の具体的なバックアップを得ながら、保護者や地域への丁寧な説明が必要である。

・学校運営協議会の対応により業務改善が進まないとしたら矛盾している。会議の時間を授業参観や行事に合わせて、平日の日中に設定するなど、工夫の余地がある。

・学校行事の精選を中心とした教育課程の編成に向けて、負担軽減すべきもの、学校教育目標達成のために不可欠なものを明確にした上で、持続可能な取り組みを継続していきたい。

・少子高齢化が深刻な地域も多い。地域の担い手としての児童生徒の存在価値を地域とともに再認識したうえで、持続可能な教育課程の編成を検討していきたい。

３　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

・コロナ禍を機に、それまでやや不確定要素が多かったGIGAスクール構想が加速度的に普及した。今後ファーストGIGAからNEXT GIGAを見据えた整備が進んでくる。児童生徒用タブレットのＯＳやアプリなどの仕様も統一され、より利便性の高いシステムが導入予定である。ＩＣＴをとにかく使う段階から、目的に応じた使用が問われることになる。

・タブレットを主としたＩＣＴの活用は、一過性のものではいけない。遠隔教育や交流活動の実践において一定の効果は見られるものの、ライブで交流する場合は、その価値を十分に検討したうえで相互にメリットがあるものを構築しなければならない。

・ＩＣＴの活用は、これまでどちらかというと、若手教員の活躍の場という要素もあった。今後は、授業力に長けたベテランの教員が、学習指導の場面でより効果的な活用方法を確立していくことが期待できる。

⑵　提言Ⅱについて

・コロナ禍は、教育課程、特に学校行事のあり方を見つめ直す契機となった。行事を精選する際、各行事の本来の目的をそれぞれの学校でどう捉えているかが大きなポイントである。

・教育課程の改善は、学校評価の結果等を踏まえ、保護者や地域と共有しながら、ゆるやかに見直し実施していくのが理想である。

・働き方改革に向けて、各校では教頭を中心に、様々な工夫をしながら時間を生み出している。その時間という資源を教職員が自分事として意識しながら活用し、業務改善につなげていくかが重要である。生み出した時間を、例えば、定時退勤、教材研究、児童生徒と向き合う時間の確保など、どう運用していくかは、各校の実情で工夫されたい。

（記録：山中　信夫・松本　有紀）

第１分科会　教育目標・教育理念に関する課題（合同）
第３(3)分科会　ＰＴＡ及び地域社会に関する課題（合同）

助言者　野木町立友沼小学校長　　神原　千里 先生

未来を切り拓く力を育てる学校教育の実践
－教育目標の具現化に向けた取組を通して－

提言地区　上都賀地区小中学校教頭会

１　提言趣旨

(1)　上都賀地区
小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

予測困難な社会情勢の中、学校の役割は多岐にわたり、複雑化してきている。

こうした社会情勢の中、魅力ある学校づくりを目指し、各学校において教育目標を実現していくことは、学校における普遍のテーマである。そこで、「未来を切り拓く力を育てる学校教育の実践」－教育目標の具現化に向けた取組を通して－という本主題を設定した。

イ　研究の概要

各学校においては、子供にとって「魅力ある学校」とは何かを第一に考え、教育活動の工夫・改善に努めることが大切である。

今年度は初年度であり、各学校の教育目標の具現化に向けた取組を調査・把握することに努めると共に、教頭としての関わりについても研修を進めた。

ウ　成果と今後の課題

・小中学校の教職員による９年間を見通した継続性・連続性のある指導の実践、学校、保護者、児童で共通理解を図った学校評価、学校運営協議会での学校経営方針の理解・承認などを通して、学校と地域が一体となった育てたい資質・能力の育成を図ることができる土台作りができた。
・育てたい資質・能力を小中学校の教員、地域、児童生徒で共通理解し、具体的な実践を通して育成できるように、今後も教頭が調整していく必要がある。

家庭・地域との連携・協働による心豊かな児童の育成を目指して
－地域とともにある学校づくりを支える家庭・地域とのかかわり－

提言地区　宇都宮・上三川地区小学校副校長会

(2)　宇都宮・上三川地区
小学校副校長会

ア　主題設定の趣旨

「地域とともにある学校」とは、学校と地域の垣根を越え、一体となって子供を育んでいく学校の姿である。そのためには、地域資源や人材の活用など、家庭・地域と連携・協働した学校運営の推進が不可欠である。

そこで、心豊かな児童の育成のためには、学校と家庭・地域がどのような連携・協働をしていくことが望ましいのか、その在り方について実践を通して明らかにしていくことを目指し、本研究を進めていくことにした。

イ　研究の概要

研究を進めるにあたり、「家庭・地域との連携・協働」「心豊かな児童の育成」「地域とともにある学校」が課題解決のための重点項目となる。今年度は初年度なので、各校が地域や近隣学校・子供会・ＰＴＡと連携・協働した取組の実践から、その内容及び効果を検証した。

ウ　成果と今後の課題

・すべての学校において、地域の実情に即して連携・協働し、様々な活動を行っている。子供たちは、学校だけでは味わうことのできない多様な人と関わる活動が体験できている。
・心豊かな児童の育成を目指して、地域と協働するためには、熟議を通して、目標を共有し、共に対等の立場で参画することに目を向けていく必要がある。そのために副校長として何ができるのかを考えていくことが課題である。

２　グループ協議内容

(1)　提言１について

・学校教育目標を見直す機会というのは、どの学校でもなかなかないのが現状である。学校の強みと弱みを分析し、強みを生かす取り組みをしていくことが大切だと思う。
・校長のグランドデザインをもとにプロジェクトチームを作り、セッションを通して出た具体策を絵や図にして職員室や教室に掲示し、可視化を図っている学校もある。
・重点項目を精選し、その内容を学校だけでなく地域も含めて学校評価で検証することで、ＰＤＣＡサイクルの意識化を図っている学校もある。教師がやることと地域に任せることを明確にすることが大切である。
・小中一貫では、ビジョンを共有することが大切。教頭が中心となって、数多く打ち合わせをする必要がある。
・コミュニティスクールの取り組みは、地域によって違いがある。栃木市は盛んに行われている。いい面もたくさんあるが、連絡調整は苦労することも多い。連絡調整をするのが時間外であることが多く働き方改革との兼ね合いが難しい。

(2)　提言２について

・大田原市では、創立150周年を記念して、地域や社会福祉協議会との関わりが多かった。盛んに行事をもつことができた。
・栃木には「栃木アシストネット」というものがあり、コーディネーターがボランティア人材を紹介してくれる。それが、地域から学校へのボランティア、学校から地域へのボランティアと双方向で行われている。
・地域ぐるみの運動会として事前に地域の団体との話合いをもって実施しているが、地域の思いが強いので、学校と地域の意見の調整が難しい学校もある。
・宇都宮では、学習支援として「地域未来塾」を行っている学校がある。年間20回、希望者を募って放課後に学習支援を行っている。時間外の活動ではあるが地域の方からは、学校職員にも出てほしいという考えがあり、調整を図ることが難しい。
・行政が、学校運営協議会の委員を紹介したり、協議会の題材を検討したり、資料作りをしてくれたりする地域がある。行政を巻き込むことも大切である。

３　指導助言

(1)　提言１について

・自校の子供たちにどんな力を付けるのかを、関係者が共有していることが大切。どんな力を付けるかを一言で表すのは難しいが、関わる人たちに分かりやすいもの、シンプルで平たい言葉、合い言葉のようなもので伝え、可視化して常に意識できるよう、教頭が中心となって対応してほしい。
・９年間を見通した教育が、当たり前のように語られるようになってきた。一人一人の教師が、当事者意識をもって関わっていくことが大切。そのためには、職員の関係が良くなることが必要。小中学校が互いに気軽に連絡し合えるような関係を作っていってほしい。
・教頭として、広い視野で、校長が示す教育目標等が、一つ一つの教育活動にどう関わっているかを若い職員にも示していくことで、教育活動の質や効果が上がってくる。

(2)　提言２について

・地元の商業組合や幼稚園、小中学校、高等学校、大学、子ども会連合会、ＰＴＡ事務局など多種多様な組織と連携をとっている。授業支援だけでなく、休日の子供たちの居場所作りを行っている地域の教育力が素晴らしい。長年の積み重ねの結果である。
・これらの活動を長く続けるためには、学校も地域の方も頑張りすぎないことが大切。地域の方は子供たちと一緒に活動できること、先生方と協力できること、そういう過程を楽しんでいる。
・地域の実情に合わせて地域連携協働活動をしていく。その地域の人材や財産を教頭として把握していくことが大切。焦って活動を進めなくても良い。
・働き方改革の観点からもスリム化を図り、これ以上の負担を増やさないようにしてほしい。

（記録：小髙　勝則・田沼　美知）

第２Ａ・２Ｂ分科会　子どもの発達に関する課題（小学校・中学校）

助言者　宇都宮市立清原中学校長　　齋藤　弘明 先生

児童生徒一人一人に適切な対応と支援を行うための体制づくり

－人・物・場所の活用をどう進めるか－

提言地区　足利地区小中学校教頭会

小中一貫教育の推進について

－９年間の系統性を踏まえた、計画的な教育を目指して－

提言地区　南那須地区小中学校教頭会

１　提言趣旨

⑴　足利地区
小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

急激な社会変化や価値観の多様化に伴い、課題も多岐にわたる状況となっている。不登校問題では、新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、学校は、その対応と支援に苦慮している。そこで、現状や課題を再度見つめ直し、個別に支援を要する児童生徒に対する関わりを研究・実践することにした。

イ　研究の概要

㈠これまでの地区研究で継続して取り組んできた「教頭の４関与」知的関与・情的関与・働的関与･物的関与を確認し、その焦点となる「人･物・場所の活用」について確認した。

㈡アンケート及びグループワークによる協議を研修部員が中心となり進め、各校の現状と課題、その共通点と相違点についてまとめた。

㈢研究主題・副主題を決定し、研究・実践開始。

ウ　成果と今後の課題

・第２回教頭研修会（５月）において、これまでの研究について前研修部長から説明を受ける機会を設けたことにより、今後の研究を進めていく上で押さえたい内容を新組織全体で確認することができた。

・研修部を中心としたグループワークによる協議を行ったことで、現状にあった課題の洗い出しが可能となった。

・研究ビジョンにつながる各校の実践を進めていく際、より効果的な教頭研修会の持ち方・研修部の関わり方を探っていきたい。

⑵　南那須地区
小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

今後３年間において、教育内容や学習活動の量的・質的充実や、中学校区が抱える課題への対応なども踏まえて、９年間の系統性を見据えた、計画的な教育を目指したいと考え、この主題を設定した。

イ　研究の概要

今年度は、本地区内の小中一貫教育に向けての現状、及び、教頭の関与についてまとめた。

㈠Ａ市Ａ中学校区の実践

ａ　組織づくりについて

ｂ　小中学校間での情報共有について

ｃ　課題の多様化・複雑化に対応するための小中一貫教育の在り方について
　→教頭の関与

㈡Ｂ町の実践

ａ　学力向上ビジョンによる授業改善について

ｂ　生徒の学ぶ意欲と学習習慣

ｃ　教師の指導力

ｄ　保護者の理解協力
　→教頭の関与

ウ　成果と今後の課題

・小中学校間にて具体的なテーマを設定し、目標を共有することにより、中学校区としての目指す子ども像が明確になった。

・教職員の負担軽減を図りながら、継続して連携を深めていく組織づくりを行っていく。

・地域や保護者とも連携を深める方策について考えていくことも必要である。

２　グループ協議内容

⑴　提言Ⅰについて

・毎日、17名が相談室登校。
・特別支援学級20名中10名が不登校。
・約410名中、不登校１名。町と協力して対策を行っている。
・完全不登校はいない。（別室登校はいる）
・教頭として、保護者と担任、保護者と外部機関とを結びつける役割を担っている。
・相談室でリモート授業を受けている。
・タブレット等ＩＣＴを活用して、不登校生徒と教室、不登校生徒と担任等を結びつけている。
・個別に支援を要するとはいっても、不登校と発達障害は分けて考えるべき。
・幼小中高の接続をスムーズにする。１人の生徒を長いスパンで見届けることが大切である。
・適応指導教室との連絡を教頭が行っている。
・空き教室を利用して対応している。その教室に常駐する教員・空き時間に対応する教員を付けている。
・心の相談室で対応しているが、学習を求めて来室する子、コミュニケーションを求めて来室する子がいるため部屋を分けている。

⑵　提言Ⅱについて

・小中一貫教育に関して教務が推進している地区がある。教頭同士が密に連絡を取り合い調整や情報収集などの先生や保護者の支援に回れるように努める。
・学区の教員同士をつなげる。
・コロナの影響もあって、ここ数年十分に小中一貫教育が機能しているとは言えない。
・中学校の先生が小学校に授業に行く、乗り入れをし、小学校の様子を知ることは大切である。
・自分たちの取り組みを見せることで職員の意識の向上を醸成する。
・校長のビジョンの基にＰＤＣＡサイクルを活用していくことが教頭の仕事である。
・学校運営協議会を小中合同で年１回実施している。
・方針を行き渡らせ、ベクトルをそろえて推進していく。
・小中連携を各地区で様々な取り組みでより良く発展させていくためには「場」が必要。（話し合って・深め・実践させていく。）先生方の負担を軽減しながら取り組めることを探していかなければならない。

３　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

５月の時点で、教頭としての４つの関与の共通理解を図ったことで、その後の進捗がスムーズとなり、研究の方向性やビジョンが決定した。限られた人的・物的資源の中で効果的な支援を実現していくためにはコーディネーターとしての教頭の役割が重要であり、各担当に役割と責任をもたせ、進行管理、動かしていくこと、マネジメントしていくことが重要である。

以下４つの観点から教頭として支援を見直していくことが大切である。

①環境整備：不登校生徒が安心できる居場所
②人的配置：校内組織と校内支援体制の整備
③専門人材・専門機関との連携：SC・SSWをうまく活用することで、つながりやすくなる。
④教職員の資質能力・対応力の向上：困っていることや効果のあった助言等を気軽に話し合う雰囲気作りに努め、支援の引き出しを増やすことが大切。

⑵　提言Ⅱについて

１年次の研究として小中一貫における具体的な実践例が報告されたが、今後の研究に見通しをもってスタートができている。義務教育９年間終了時の児童生徒を思い描き、小中のそれぞれの段階で子供たちにどのような力を身に付けさせるのか、系統立てて指導するための問題解決の方向性が見えてきたのではないか。

達成目標の具現化や組織体制の取組を実効性のあるものとして教職員が主体的に推進していくためには、教頭が取組を把握・意味付け、適切に評価し、必要があれば修正するなど、リーダーシップを発揮することで教職員のモチベーションは高まり次年度の研究推進の原動力となる。

また、連携組織の部会やハッピースローププランなど実効性のある実践により、互いに学び高めあう教職員集団による組織の活性化など協働体制構築による資質の能力の向上が見られた。

周知という点では、情報を発信し、学校の姿を外部に提供していくことが大切である。

（記録：長竹　　研・大木　雅子）

第３⑴分科会　施設・設備及び事務に関する課題（合同）
第３⑵分科会　教育行財政に関する課題（合同）

助言者　栃木県教育委員会事務局義務教育課副主幹　　砂川　裕美 先生

児童の安全・安心を支える学校づくり
－安全・安心な学校施設・設備を目指して－
提言地区　宇都宮・上三川地区小学校副校長会

魅力ある教育環境の創造に向けて
－地域・教育行政との協働－
提言地区　塩谷地区矢板市教頭会

１　提言趣旨

⑴　宇都宮・上三川地区小学校副校長会

ア　主題設定の趣旨

学校施設は、児童をはじめ利用するすべての人々にとって常に安全で快適なものでなければならない。そこで、安全・安心な学校施設・設備を目指し、維持管理に必要な取組や改善策、副校長・教頭の役割などについて研究したいと考え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

１年次の本年度は、各校の施設・設備に応じた安全に関する取組の実態を洗い出し、敷地内駐車、遊具の修繕、熱中症予防対策、樹木の安全管理、不審者対策等の課題を把握した。２年次は、把握した課題の改善に向けた各校の実践を通してさらに研究を進めていく。そして３年次には、改善した実践の考察と新たな提案についてまとめ、副校長・教頭が果たすべき役割をより明確にしていく。

ウ　成果と今後の課題

・各校の現状から､以下の課題が明らかとなった。

①地域コミュニティの核として学校には多様な人々が来校するが、それに伴った施設・設備の改善が進められているとはいえない。

②学校内の施設・設備の老朽化が進んでいるが、修繕費が高額であるため、すぐに対応できないことが多い。

③近年の気候の変化等に伴う安全面での対応が新たに必要となっている。

・今後は、これらの対応策をより有効に実践するための方策や、副校長・教頭が果たすべき役割について、さらに探っていく必要がある。

⑵　塩谷地区矢板市教頭会

ア　主題設定の趣旨

各学校の教育課題解決に向け、魅力ある学校づくりや地域社会との連携、行政と学校の関係などの課題に対してどのように関わるのか関与性の視点から課題に迫るため、本主題を設定した。

イ　研究の概要

「⑴学校と地域が連携する取組」と「⑵情報化につなげる取組」について、現状を把握し改善点を検討するために、各学校でこれまで行われてきた活動を洗い出し、教頭の関与のようすや成果についてまとめた。

⑴地域が中心となって運営する放課後子ども教室、コミュニティ・スクール（ＣＳ）の導入、地域学校協働活動の充実、地域クラブ活動実証事業

⑵矢板市のＩＣＴ化・ＧＩＧＡスクール構想と学校の取組、ＩＣＴを活用した授業実践・校内研修・働き方改革等

ウ　成果と今後の課題

・学校と地域が協働しながら、地域の教育力を最大限活用することで、教育活動に係る費用も抑えられ、費用対効果は大きくなった。

・市教育委員会の主導により、ＩＣＴに関する研修会の実施やＩＣＴ活用を推進する教員からの支援等があり、効果的な使い方を教職員が学ぶことができた。

・ＣＳにＰＴＡの関わりを一層深めていくこと、学校・地域にそれぞれの核となる人員の配置、地域資源の発掘等の課題が見えてきた。

２　グループ協議内容

(1)　提言Ⅰについて

・どの学校にも校舎の老朽化、樹木の伐採、不審者対策等同じような課題があり、それぞれ改善に向けて取り組んでいるが、予算には限界があるので、行政がやることと学校がやることの区別を明確にし、学校間や市町間で差が出ないように進めていけるとよい。
・施設・設備の修繕等に関しては、地域の方やボランティア、教育委員会や行政などの力を借りて、マンパワーを最大限に活用することが必要である。(マネーパワーよりマンパワー)
・子供が修繕箇所を見つけてくれる事例などもあり、児童生徒自身が安全意識を高められるような取組も有効である。
・どの市町も財政難で思うように整備が進まない状況だが、公民館の事業とタイアップして樹木の剪定を行ったり、企業のボランティア事業を活用して修繕を行ったりしている学校がある。一方的ではなく互いにプラスになるような取組を工夫して働きかけたり、日頃から人とのつながりを大切にして良い関係づくりに努めたりすることも大切である。

(2)　提言Ⅱについて

・地域との連携を進める際、教頭はじめ担当職員の負担増が課題となる。地域にボランティア協力を求める際は、学校から情報を発信し、理解を深めてもらうことが大切である。働き方改革を進める上でもボランティア活用に対する教師側の意識改革も必要である。
・地域ボランティアとの関係を長続きさせるためには、程よい関係性で、通知作成等の仕事量を増やすことのないように進めていく方がよい。また、地域の方に助けてもらうばかりではなく、児童生徒が地域に出て地域のために、活動に参加できるとよい。
・中学校区で学校運営協議会を実施する場合、小中学校それぞれの部会の取組が見えるよう、お互いの教頭がメンバーとなって参加し、情報を共有している事例もある。
・地域や教育委員会のマンパワーを最大限に活用させていただくことが大切である。
・コロナ禍のため様々な場面でＩＣＴ化が進んだ。オンライン形式の集会等も適した場面では残していきたい。しかしながら、地域と学校との間に生じた距離を縮めていく努力は必要である。

３　指導助言

(1)　提言Ⅰについて

・学校教育活動を行っていく上で一番大切なことは安心安全であり、我々は子供たちの命を預かっていることを絶対に忘れてはならない。令和４年３月に策定された「第３次学校安全の推進に関する計画」や県の「教育振興計画2025」でも学校安全の徹底・充実が第一に示されている。子供たちの命を守るという視点で見てほしい。
・今回の提言では、児童の安全を最優先に考えた取組や危機管理マニュアルの計画的な見直し等素晴らしい事例が示されていた。学校によって実態は異なっているが、もし自分の学校だったらと想定しながら自分事として課題を捉え、他校の工夫を取り入れたり検討したりしながら、各学校の実態に応じた取組を行ってほしい。
・学校は地域コミュニティの拠点であるという点も視野に入れ、教頭として果たすべき役割について今後も検討を深めてもらいたい。

(2)　提言Ⅱについて

・今年６月に閣議決定された教育振興基本計画の中の基本的な方針として「地域や家庭でともに学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進、教育デジタルトランスフォーメーションの推進」があり、まさに今回の提言に関わっている。
・学校と地域が連携する取組と情報化につなげる取組について、教頭が中核として地域や行政と上手く連携し、様々な連絡調整を図りながら活動を進めている事例がたくさんあった。
・情報化については、働き方改革としても有効な取組が紹介された。
・学校・地域・家庭・行政が連携して、地域の特色を踏まえながら魅力ある教育環境を創造していく上で、その中核となるのが教頭・副校長である。地域の実態を十分把握したうえで、家庭・地域・行政のつなぎ役として進めてほしい。
・今回の様々な取組を参考にしながら、学校・地域・行政と連携しながら子供たちのためにより良い学校教育につながるよう進めてほしい。

（記録：髙野　敏子・田村　春美）

第４Ａ・４Ｂ分科会　組織・運営に関する課題（小学校・中学校）

助言者　小山市立小山城南小学校長　　小松原貴子 先生

地域社会との継続的な連携・協働を可能にする組織・運営

－コミュニティ・スクールを生かした学校と地域の連携・協働を通して－

提言地区　那須地区大田原市教頭会【Ｂ】

組織力向上を図る体制づくり

－「チームとしての学校」の推進－

提言地区　芳賀地区芳賀郡市小中教頭会

１　提言趣旨

⑴　那須地区
大田原市教頭会【Ｂ】

ア　主題設定の趣旨

「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を作る」という理念を実現させるために、地域社会との継続的な連携・協働を可能にするコミュニティ・スクールと地域学校協働本部の組織作りや運営について研究し、教頭としての関わりについて考えていくことにした。

イ　研究の概要

⑴１年次：各学校の現状の把握と課題の整理（アンケートの実施）

⑵２年次：課題解決に向けて、具体的な実践を通しての研究

⑶３年次：２年次までの課題を解決するための研究とよりよい地域との継続的な連携・協働に関する取組のまとめ

ウ　成果と今後の課題

〇本市の各コミュニティ・スクールの組織編成や運営状況がよく分かった。

・コミュニティ･スクールの組織･運営について、ＰＤＣＡサイクルで改善していく。

・コミュニティ･スクールの組織･運営を生かし、地域学校協働本部の組織・運営を考えていく。

・公民館や地域の各種団体との連携を図り、協力を得ながら地域学校協働活動を実施していく。

・各校の地域学校協働活動の組織や運営方法を見直し、効果的で継続可能な活動にしていく。

⑵　芳賀地区
芳賀郡市小中教頭会

ア　主題設定の趣旨

今日、学校が抱える問題は複雑・多様化しており、対応に苦慮している。また、働き方改革の推進や若手教員の増加、代替教員の不足等に対し、校内の支援体制や連携・協力体制の構築が必須である。これらの課題に、組織として機能し、課題に適正かつ迅速に対応する体制づくりをめざし、本主題を設定した。

イ　研究の概要

研究の初年度として、各校の取組の実際についてアンケートを実施し、各校の取組から見えてきた課題を分析・類型化した。

「人材育成に関すること」「リスク管理や危機管理に関すること」「地域連携（コミュニティ・スクール）に関すること」「異校種連携に関すること」「その他学校運営全般に関すること」の５つの項目に類型化し、課題分析を進めた。

ウ　成果と今後の課題

各校の情報を収集・類型化することで、共通の課題が明らかになり、校種を超えて互いに連携することが有効だと分かった。また、どの学校も若手教員の育成が急務であり、教頭としての役割の重要性を再認識できた。

今後、校種や地域等の特性によって異なる課題に応じた解決方法を模索しなければならない。また、コロナ禍によって見直しを図った教育活動の精選・充実をいかに図るべきかを検討する必要がある。

２　グループ協議内容

(1)　提言Ⅰについて

・各グループとも各学校・地域の現状について意見を交わした。
・小中一貫教育に合わせて学校運営協議会を立ち上げているケースが多いことが分かった。
・地域学校協働本部のみならず、中学校区で一つの学校運営協議会を設置しているケースや地域学校協働本部とコミュニティ・スクールの両方とも導入している市町がかなりあることが分かった。
・学級担任が地域連携教員となるのは、その業務内容を考えるとかなり難しいのではないか。
・小中一貫教育とタイアップして地域学校協働活動は行われることが考えられる。誰が窓口になり、すりあわせの時間をどう確保していくのかが、課題であると考えられる。
・文書の作成、会の運営、地域ボランティアとの連絡調整等、かなりの業務が教頭に課せられている学校が少なくない。
・地域コーディネーターを任命し、ボランティアの人選、連絡調整してくれる市町もある。
・学校評議委員から学校運営協議会に移行しているため内容があまり変わらないケースがある。

(2)　提言Ⅱについて

・若手職員だけでなく、同時にミドルリーダーの職員も育てる必要がある。また、４年目以降の職員にメンターとして面倒を見てもらう。
・行事等の改善点は焦点化し、すぐに実行するよう意識できるようにすることが大切である。
・若手職員への研修は、市町教委ごとに計画されており、数年にわたり指導がなされている。しかし、彼らの指導力を上げるには、日頃から互いに授業参観を実施するのがよい。学力向上委員等に見てもらうのも効果的である。さらに、小中学校間で、授業を参観し合うのもよい。
・若手職員への指導は、ハラスメント等を考えると難しい場面が多い。「注意する」よりは、困っていることを一緒に考える姿勢が必要なのかもしれない。また、彼らができていることを周囲に認められるような雰囲気作りも大切である。
・コンプライアンスやリスク管理の問題は、その都度、情報を共有し、組織で取り組まなければならない。可能な限り、職員に対応を考えてもらうよう工夫する必要がある。

３　指導助言

(1)　提言Ⅰについて

・キーワードは「継続的な」である。平成30年度から８つの中学校区での小中連携、小学校から中学校へ、校種を超えて育ちや学びをつなぐことは有意義なことである。
・設置が努力義務になったコミュニティ・スクールについては各校が試行錯誤している段階で、市内の現状を把握し浮かび上がってきた課題を考察し、４つに絞った点は良かった。次年度に生かされると思う。
・コミュニティ・スクールの組織については地域に関わりが強い人材が選出されており、非常に大切であると考える。
・いつ、どのような支援を必要としているのかを把握することと、どこにどのような支援をできる人がいるのかの情報をより多く把握することが大切である。ボランティアとの調整及び地域コーディネーターとの連携が重要となる。

(2)　提言Ⅱについて

○「チーム」としての学校とは、自校内チームと、関係機関との連携チームの２つのチームが考えられる。

〈自校内チームの強化〉

・若手職員の指導においては、一人一人の特性を見極めながら、自校の課題に対応できるよう工夫しなければならない。
・コンプライアンスや危機管理等の情報は、（「レーダー」になって）教頭自らキャッチし、職員へこまめに発信していくことが大切である。

〈関係機関との連携チームの強化〉

・小中合同引渡し訓練は、実施の難しい面が多いが、命に関わるものなので、非常時に混乱しないように訓練を実施していくべきである。
・学校支援ボランティアとして、地域の人々だけでなく、退職教員等に支援してもらうのは効果的である。

○「強い」だけでなく、どんな問題にも柔軟な対応ができる「しなやかな」組織こそ、これから求められる姿ではないかと思う。

（記録：大島　徳彦・齋藤　珠美）

第５Ａ・５Ｂ分科会　教職員の専門性に関する課題（小学校・中学校）

助言者　宇都宮市立陽西中学校長　　鈴木　佳之 先生

個々の資質能力の向上と教職員集団の力を高めるための教頭の役割

－連携協働し互いに高め合う教職員を目指すための本市の実態及び課題把握－

提言地区　佐野地区小中学校教頭会

未来を切り拓く力を育む教職員の専門性の育成

－教職員の実践的指導力の向上を図るための教頭の役割－

提言地区　下都賀地区小山市教頭会

１　提言趣旨

⑴　佐野地区
小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校は、変化の激しい時代を生き抜き、持続可能な社会の創り手となる児童生徒の育成を図ることが求められている。さらに、様々な学校の役割への適切な対応、そしてミドルリーダーや若手教職員の育成等、学校の教職員一人一人の資質能力の向上を図り、教職員集団の力を高めるためには、どのような取組が必要且つ効果的なのか、また、教頭としてどのように取組を進めていけばよいのかを研究することを目的として本主題を設定した。

イ　研究の概要

①第１年次（令和５年度）
資質能力向上に係る課題と取組の現状把握。

②第２年次（令和６年度）
課題解決の取組の実施と最終年度への確認。

③第３年次（令和７年度）
取組の成果と課題の確認と、共有化。

ウ　成果と今後の課題

・専門職の教職員として求められる資質能力のイメージや教職員集団の力を高める大切さを市内各校で共有できた。
・市内各校の取組や課題等の現状について共有でき、研究の方向性を決定できた。
・教職員の資質能力を高める取組についての成果指標を検討する必要がある。
・学ぶ意欲の向上のために、研修履歴を活用した指導助言等を工夫する必要がある。

⑵　下都賀地区
小山市教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校教育力の維持向上に向けた教職員の資質向上と勤務意識の高揚は、今後のベテラン教員の大量退職と若手教員の増加が著しい現状において喫緊の課題である。本市の年代別構成では、50歳代が約３割を占め、教職員の大量退職の時期を迎えている。ベテラン教員が大量退職し、若手教員が急増する現状において教職員の専門性を育成するため、特に若手教員の実践的指導力の向上のために、教頭としてどのような役割が求められているかを明らかにすべく本研究課題を設定した。

イ　研究の概要

研究初年度である今年度は、「実践的指導力」をこれからの教職員に求められる資質・能力との関連から捉え、実態を把握した上で「学習指導」・「生徒指導」における「実践的指導力」を育成するための教頭の関わり方に焦点を当てた。

ウ　成果と今後の課題

成果として、市内の教職員が求めている資質・能力を把握することができ、教頭として実践的指導力向上のために必要な要素を分析し、自校の課題を明確にできた。また、実践例を共有し、自校の活性化につなげることができた。

今後、職員研修の効果的な実践を目指してマネジメントすると同時に、「研修履歴」の効果的な活用や、共有する場の意図的な設定により、教職員自身の成長につなげるようにしていきたい。

２　グループ協議内容

⑴　提言Ⅰについて

『連携協働し互いに高め合う教職員集団になるために、各教員の自立的なモチベーションを高める工夫、研修等の時間の確保、環境整備等はどうあるべきか』を協議した。

「ＯＪＴを積み重ね、成果を認め成功を励ますようにする。」「研修時間を上手に使っていけるように日課を工夫してみる。」「保護者対応をサポートしていくために、まずは組織的対応の体制をつくる。」「実践的指導力を育成するために教頭として関わった事例を伝えたり、効果的なことをアドバイスしたりすることが大切である。」「校務分掌の精選を一層進め、研修の時間を確保する。」「若手同士の学び合いができるようにする。」「時には立ち話程度の小研修を有効活用する。」などの意見が交わされた。また、そのための環境整備については、「感染症予防に努める。」「ＩＣＴ関係の掲示板を設置していつでも確認できるようにする。」「部活動や清掃の取組を工夫するなどの働き方改革の視点が重要である。」との意見が紹介された。

⑵　提言Ⅱについて

『教職員の実践的指導力を育成するために教頭として関わってきた事例は効果的であったか』について協議した。

「ＯＪＴを活用してベテラン教員にミドルリーダーを育成させる機会を増やす。」「職員のニーズに合わせて教頭によるミニ研修を行って、30代の教員にミドルリーダーとしての意識付けを行うことができている。」「オンライン研修、班別研修等、そのときに応じてフレキシブルな形での研修を実施していくことは効果的である。」等の意見が上がった。教職員参加型の学校運営協議会の事例については、「教員も地域の『顔』を知ることができる。」「教職員と地域が強くつながる良いアイデアであり、参加者から自校での学校運営協議会についても工夫をしていきたい。」との意見が多かった。

(1)、(2)とも、学校規模や小中の違いはあるものの、本部会のテーマについては身近な課題として捉えている学校が多く、各校とも人材育成や時間の確保についての苦労、教頭として工夫している点などを紹介し合いながら自校化できる方策を探る様子がうかがえた。また、どちらの提言に関しても、ＩＣＴの有効活用について紹介する意見が上がっていた。

３　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

・市内の教職員にアンケートをとり、課題意識を整理するなど、教職員研修を取り巻く課題を多面的に抽出したことで、研究や取組の方向性が見えてきた。
・校内研修はもとより、地区教科研究会や行政など多方面の力も活用して、教員のＩＣＴ活用力を高めることを考えてほしい。そのためには、校内の活性化が有効であり、ＩＣＴ支援員や情報が得意な教職員を中心に、ＯＪＴを機能させ、日々実践していくように配慮してほしい。
・今までの校内研修は、定期的に同じ時間帯に同じ場所で、全員集まって、が定番だったが、その型を崩し、フレキシブルな場にしていく。
・３つのキーワード「主体・能動」「協働」「個別最適」を意識して研修会を計画していく。

⑵　提言Ⅱについて

・教職員の意識アンケートは現場の声であり、「各校の強みと弱み」という問いにより、課題をうまく引き出すことができていた。
・各校の取組が、いずれも「実践的な指導力」を強く意識した取組であり、「自立」「協働」「創造」を意識したものとなっている。
・山本五十六のことばのように「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず」、「やっている、姿を感謝で、見守って、信頼せねば、人は実らず」このことばは、リーダーとしての人材掌握術を言い表しており、教職員と向き合う心構えとして大切にしてほしい。
・多忙で余裕がないからこそ、校内研修が必要だと捉えたい。研修→教師力向上→子どもの成長・変容＝教師にとってうれしいこと＝職に対する誇りややりがいを感じる、これは、一直線のベクトルである。

（記録：狐塚　洋志・木村　雄一）

１学年総合的な学習の時間「たたら製鉄」

那珂川町立小川中学校　関　　義　朗

本校は、栃木県の東北東に位置し、東に八溝山系、中心部を清流那珂川が南流しています。生徒数は98名の小規模校で、近くには国指定史跡の駒形大塚古墳があります。

本校では、１学年の総合的な学習の時間で、「地域の歴史」をテーマに学習します。最初に、元本校ＰＴＡ会長で国士舘大学教授の眞保昌弘様を講師として、那珂川町の歴史について講話を聞き、生徒たちも改めて那珂川町に重要な歴史があることに感心し、興味関心を高めていました。

次に、数か所の古墳に行き、眞保先生から話を聞いて理解を深めました。また「東山道跡」を歩いたり「那須官衙遺跡」（奈良時代のころに作られた役所跡）の礎石の上に立ったりして、当時を思い起こしました。

那珂川では砂鉄がよく取れ、製鉄をしていた歴史を知り、砂鉄から鉄を作る「たたら製鉄」を行いました。この体験活動では、那珂川町在住の刀匠の高野和也様にご指導いただきました。砂鉄をよりきれいにして小麦粉で練り、それを炉で加熱して鉄にします。炭切りも生徒は丁寧に慎重に行いました。

11月９日㈭保護者も参観しながら、炉に火を入れ、砂鉄（砂鉄と小麦粉を練ったもの）を入れ、ふいごで何回も空気を送り、火力を上げ、鉄を作ることができました。砂鉄が、大きな黒い塊（鉄）になって出てきたときは生徒も歓声をあげて喜びました。約３kgの鉄の塊ができました。

毎年、１年生は「那珂川町の歴史」について学習し、地域の歴史の深さや重要性を知ることができます。さらに、「たたら製鉄」を行うことで、鉄を作ることの大変さ、資源の大切さを学ぶことができます。この活動は地域の良さを知る良い機会となり、本校にとってなくてはならない大きな特色であります。

伝統をつなぐ「マスゲーム発表会」

佐野市立あそ野学園義務教育学校　立　川　文　春

本校は、令和２年４月に県内３番目の義務教育学校として開校しました。

学校教育目標は「叡智、信愛、克己を重んじ、自主・創造する児童生徒」の育成であり、目指す生徒像は「ふるさとを愛し、自ら学び、心身を鍛え、未来を拓く、児童生徒」です。これらには、本校を卒業した子供たちが、自分のふるさとを愛し、誇りに思いながら、困難に負けず未来を力強く切り拓き、地域や社会に貢献できる人になってほしいという願いが込められています。

前身の田沼西中学校時代の1974年から受け継がれてきたマスゲームは、今年で通算49回目の開催となりました。

マスゲームを進めるにあたって、各学級から実行委員が選出され、実行委員会が発足します。９年生が中心となり、テーマを決定し、演技構成を考えたり、使用する楽曲を選定したりします。手具の管理や校庭のライン引きも行います。そうして生徒の主体的な取組が伝統として受け継がれていきます。今年度のメインテーマは「飛翔」～大きく羽ばたき、つくる未来～でした。１～４年生と保護者が見守る中、５～９年生が約１時間の演舞を披露しました。それまでの努力と苦労が報われた素晴らしい発表に、会場から大きな拍手や歓声が上がりました。発表を終えた児童生徒の笑顔と涙を目にし、こうして伝統が受け継がれていくのだと実感しました。これからもこの良き伝統が受け継がれていくことを願っています。

宇河地区中学校副校長・教頭研修会の取り組み

宇河地区中学校副校長・教頭会長　小　森　正　伸

本会は、宇都宮市立中学校25校の副校長26名（１校が複数配置校）と宇都宮大学共同教育学部附属中学校、県立宇都宮東高等学校附属中学校の教頭２名、上三川町立中学校３校の教頭３名の31名で組織されています。会の運営の効率化を図るため、研究部・広報部・調査部・ＩＴ部の４つの専門部と事務局に分かれ活動しています。

また、河内地区と合同で年６回の研修会を開催しており、研究課題についての共通理解をはじめ、各校で課題となっていることや疑問のあることなどについて、情報交換や協議をしています。

研究部では、昨年度までの３年間「組織・運営に関する課題」において「家庭や地域社会との連携を生かした学校危機管理体制の在り方」と題して、危機管理体制の構築に係る教頭としての役割について研究しました。研究では、新型コロナウイルス感染症という未曽有の状況を乗り越えながら、日々の危機管理において、実情に応じた危機管理体制が構築された各校の優れた実践を取り上げ、リスクマネジメント、クライシスマネジメントの観点から今後の課題を明らかにしました。

今年度からは第13期に入り、本地区は「教育課程に関する課題」を研究することとなりました。昨年度までの研究とは異なりますが、危機管理同様、コロナ禍を通して大きく見直しが図られた内容です。主題を「コロナ禍を超えて－持続可能な教育課程の編成と教頭としての役割」として研究をスタートさせました。今年度は各校のこれまでの取組と課題について整理しましたが、課題の解決に向け各校で実践を積んでいき、今後も研究を深めていきたいと思います。

那須地区小中学校教頭会の取組

那須地区小中学校教頭会長　須　藤　　敦

那須地区教頭会は、那須町・那須塩原市・大田原市の３市町の小学校43校・中学校19校・義務教育学校２校の教頭67名で構成されています。那須地区全体の教育活動に関する情報交換を行う場として位置付けられるとともに、県教頭会での研究主題を受け研究を進めたり調整したりする組織としての役割を担っています。

そこで、研究活動を円滑に進めるため、那須地区を「那須町」「黒磯地区」「西那須野･塩原地区」「大田原地区Ａ」「大田原地区Ｂ」の５つのグループに分け、各地区の研究部員を中心に研究を進めています。

今年度は、会員全員が参集する形で「那須地区教頭会全体研修会」を10月に開催できたところです。５つの地区の研究の成果を共有し、課題について直接話し合うことで、学校運営上の様々な気付きや手がかりを得られたと感じています。また、11月に開催された県教頭会の第61回研究大会では、那須地区として組織・運営に関する課題について研究提案を行うことができました。３か年の研究の第１年次となる研究です。今後も３年間を見通し、計画的に研究が推進できるよう那須地区教頭会として取り組んでいきたいと考えています。

さて、那須地区全体で見ると、児童・生徒数の減少、学校規模の適正化に向けた統合・再編の動き、教職員の年齢構成の偏り、働き方改革の推進への取組などの様々な課題があります。教頭会も会員数の減少が予想されますが、そうした中でも「魅力ある学校づくり」のために、教頭として何ができるのかを考え実践していくことが求められます。教職員がやりがいを感じ、元気に働ける環境を整えることは、児童・生徒が生き生きと笑顔ですごす学校づくりに繋がるのではないでしょうか。そのためにも教頭同士の協力やネットワークは大切な要素です。那須地区教頭会がそうした場を提供できるよう活動を継続していきたいと思います。

ひ　ろ　ば

迫力とスピード感を楽しむ

鹿沼市立永野小学校　長島　浩文

「よっしゃ―――！」
スポーツが大好きな私は、この一年、テレビを観ながらこの言葉を何度叫んだことだろう。

近年の日本スポーツの躍進には、目を見張るものがある。野球、サッカー、バスケットボール、ラグビーなど、多くの競技で日本代表が活躍し、日本を盛り上げてくれている。

多くのスポーツの中で私が一番好きなのは、ラグビーである。大学一年生のときに国立競技場に「全国大学ラグビー選手権決勝」を観に行き、それ以来ラグビーの迫力とスピード感に魅了され、ラグビーの大ファンになった。ラグビーは、大男たちが全力でぶつかり合うその迫力と、オリンピックの100m走のようなスピード感あふれる走りを同時に味わうことができるスポーツである。ルールを知らなくても、それだけで楽しめる。また、激しい試合が終了（ノーサイド）したあとは、敵味方関係なく、力の限りを尽くして戦ったお互いを称え合うスポーツでもある。「紳士のスポーツ」と呼ばれ、それも魅力の一つである。

2019年日本開催のワールドカップ以来、生で観戦することができていないので、機会があればスタジアムに足を運び、テレビでは聞こえないぶつかり合う音や観客の大歓声を感じながらラグビーを楽しみたいと思っている。

花咲かじいさん

芳賀町立芳賀中学校　柳　　利道

私は小さな鉢植えを育て、花を咲かせるのが好きだ。とは言っても、珍しかったり、貴重だったりする花ではなく、普通に教室で育てるような花だ。

きっかけは、担任をしていたとき、生徒が教室にある草花の枝を折ってしまうことがあった。捨ててしまうのも忍びないので、それを挿し木にしてもう一度花を咲かせた。それ以来、枯れそうな草花を復活させることが楽しくなった。初めて中学３年生を担任した年の卒業式でのエピソードである。卒業式の後、生徒たちが、担任の先生への感謝の気持ちを込めてセレモニー。他の担任の先生には、大きな花束と色紙を渡されて、感激している中、自分には何もない。「薄情なやつら」と思っていたとき、学級の子たちに、「先生にはこれです。」と梅の盆栽と初めての盆栽という本を渡された。よく見ているものだなと感心したと同時にさすが我が教え子と感激したのを覚えている。

梅の盆栽は、今や地植えになってしまったが、10年前に教室に飾ってあったゼラニウムやマーガレットは、まだ現役で咲いている。今後も、枯れそうな花を復活させる花咲かじいさんとして活躍していこうと思っている。

男体山の思い出

さくら市立氏家小学校　見目　正恵

毎朝、男体山を遠くに見ながら通勤しています。先日、いよいよ山頂が白くなっていて冬の到来を改めて感じました。男体山には思い出があります。

初任の学校で無我夢中で過ごす私に、先輩の先生方が、男体山登拝大祭に誘ってくださいました。日光二荒山神社境内の登拝門を８月１日の午前零時に出発し、暗闇の中懐中電灯を手に登りました。６合目を過ぎると、暗さもあって体力も気力も限界がきました。先輩方はそんな私に「ゆっくりでいいよ。」と声をかけ、何度も一緒に休憩をとったり楽しいことを言って元気付けてくださったりしたのです。申し訳なさで一杯でしたが、「頑張ってみんなと山頂までいくぞ。」という強い気持ちが湧いてきました。日の出前には無事山頂にたどり着きましたが、霧で御来光は拝めませんでした。それでも、大きな達成感と先輩方の温かさ、みんなと山頂で食べたおにぎりの味は私の心に強く残りました。

先輩方は男体山登山を通して、心のゆとりや困ったら助け合うということを教えてくださったのです。私は男体山を見るたび、自分がいかに多くの方々に支えられてきたのかを思わずにいられません。それと同時に、私もあの時の先輩方のように、先生方の力になりたいと思うのです。

編集後記

今年は新型コロナウイルス感染症が５類に移行し、コロナ禍以前に行われていた特色ある学校づくりに係る教育活動を有意義に再開している学校も多いのではないかと拝察します。県教頭会におきましても、グループ協議を再開して、第61回研究大会を開催し、13期研究の１年次をスタートしました。今号は、その様子を中心に編集しました。少しでも会員の皆様の参考になれば幸いです。末筆ながら、お忙しい中原稿をお寄せいただいた皆様に深く感謝申し上げます。

（鈴木）